

第30回「ことば」フォーラム

日本語の中の外来語と外国語  
- 新聞，雑誌，テレビ -

2007年2月24日（土）

国立国語研究所 講堂

福田 亮（朝日新聞社）  
伊藤 雅光（国立国語研究所）  
塩田 雄大（NHK放送文化研究所）

独立行政法人 国立国語研究所

## 【あいさつ・趣旨説明】

司会（野山） 今日のテーマですが「日本語の中の外来語と外国語」で、「新聞・雑誌・テレビ」という副題を付けてあります。これまでフォーラムを29回行なって、今日は、記念すべき30回目です。この時間の最初に申し上げたいと思ったことですが、ここに来られない方のためにも、是非文字化したものをWEB上のホームページで提供できたらいいなというような発案がありまして、質疑応答も含めて文字化したものを掲載しようということになりました。休み時間のときに質問票を書いていただくわけですが、文字化する場合、もちろんお名前は伏せますが、内容そのものはいずれ「ことば」フォーラムのホームページに掲載されるということを御了解いただいた上で質問票を書いていただければありがたいと思います。今日は、内容をご覧になって分かるように、新聞記事、それから雑誌、テレビ、ラジオ、この分野からお三方に話をさせていただきます。それから、これを外来語と外国語という観点からディスカッションをしていくということになります。皆さんに御協力していただきながら、約3時間ですが、よろしくお願ひします。申し送れましたが、全体の総合司会をします、国立国語研究所の野山と申します。よろしくお願ひします。それでは早速ですが、国立国語研究所長 杉戸より御挨拶申し上げます。

杉戸 ようこそお集まりくださいました。暖かいのですけれども、実感として春二番、三番というべき風が吹きまわっております。そのような中、大勢の御参加をいただきまして、本当にありがとうございます。今日の「ことば」フォーラムは、国立国語研究所が8年ほど前から、年に数回ずつ開いてきているものです。今回で第30回を迎えます。日本語をめぐって、あるいは言葉そのものをめぐって、その時々話題を選びまして、世の中の言葉のあり方、あるいは、言葉の研究でどんなことが分かってきているのか、ということテーマにして開く催しです。研究や教育の専門家だけでなく、いろいろな領域、立場でお仕事をなさっている、いろいろな立場の方、主として一般の方にお声をかけてお集まりいただき、皆で言葉について一緒に考えようと、そんな趣旨で開いてきているものです。言葉を見つめ直す、言葉を考える、そういった時間を暮らしの中で取り戻したいものだ、私など、思うのですけれども、この「ことば」フォーラムというものが、そのようなことのきっかけになってくれることを期待して、開き続けております。本日は「日本語の中の外来語と外国語」、そういうテーマを選びました。このあと、担当者からより具体的な御説明をいたしますが、とりわけ、新聞、雑誌、あるいはテレ

ビ,ラジオなど,マスメディアで,いろいろな立場の人が広く読んだり,聞いたりする,その言葉の中での外来語あるいは外国語,これに目を向けるという企画です。よく言われることですがけれども,分かりにくい外来語,なじみのない外来語が増えている。次々に現れて,あるものはずっと定着して使われ続け,あるものは消えていくという,非常に目まぐるしい状態が,外来語あるいは外国語ということに付きまっております。特に「外国語」と今日テーマの中に入れましたものは,カタカナで書かれて日本語の中に定着したと言える外来語とは違って,外国語のつづり,文字表記そのまま日本語の文章の中ですとか,あるいは看板,雑誌の表題などにあらわれている,そういったものをここでは外国語と呼ぼうとしております。そういうものが目立つようになってきております。今,実際に,そういった外来語,外国語がどんな状況にあるのか,この先どんな方向に動いていきそうにとらえられているのか,そこにどんな課題や問題があるのか,そういった点について皆さまと御一緒に考える時間を持ちたいと,そう願っております。そうしたテーマについて,本日は新聞と放送の現場から,お二人の講師をお願いしております。朝日新聞社の福田さん,それからNHKの塩田さんです。それぞれ新聞社の中でも校閲の部門,あるいはNHKの中でも放送用語の調査・研究部門という部門で,毎日,言わば言葉そのものに直接向かい合って,仕事をなさっている方たちです。その立場から放送の現場,あるいは新聞の現場で,具体的にどんな言葉が,どういうふうの問題になっているのかということ,言わば,生きのいい情報としてお話しただけだと,大変ありがたく思っております。どうぞよろしく願いいたします。付け加えますと,そのお二人の御所属の朝日新聞社,それからNHKの放送文化研究所,そして,私どもの研究所のある立川市から,それぞれ今日の催しに御後援もいただいております。改めてお礼申し上げます。この後,福田さん,塩田さん,お二人のお話の間に,私どもの研究所員,伊藤も加わって,発表を合わせて3件お聞きいただきます。そして,最後の質疑討論の時間を1時間予定しております。これまでの「ことば」フォーラムに比べて,長目に準備しております。御来場の皆さまからも御意見とか,御質問をたくさん頂ければ幸いです。ゆくゆくは文字に直して,インターネットのほうに載せていきたいということを申しました。その点も御了解いただいて,遠慮なくお書きください。さらにもう一つ付け加えますと,すでに会場にお入りになるときにご覧いただいた方も多かろうと思いますが,会場前のロビーでは,本屋さんが展示販売を出してくださっています。今日のテーマ,外国語あるいは外来語,あるいは用語という,そういう領域での出版物あ

るいは資料，朝日新聞社さんのもの，あるいはNHK放送文化研究所さんのもの，あるいは私ども，国語研究所のもの，そういったものを中心にして，展示してもらっております。どうぞご覧いただきますよう御案内いたします。4時半までの短い時間ではありますけれども，御来場いただいた皆さま方が，それぞれに日本語やあるいは言葉，更に絞って外国語とか外来語，そういった言葉の問題について，立ち止まってお考えいただく，そういう機会になることを願っております。それがこの場だけでなく，御家庭で，あるいは職場で，毎日の暮らしの中で，言葉を改めて見つめ直す，話題にして話し合う，そうした時間をつくっていただくための，そのきっかけに今日のこの時間なることを重ねて期待して，最初の御挨拶といたします。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。（拍手）

司会 それでは引き続き，当研究所，伊藤の方から，趣旨説明をいたします。

伊藤 私は当研究所の研究員，伊藤雅光でございます。本日は朝日新聞の福田亮さんと，NHKの放送文化研究所の塩田雄大さん，そして私，伊藤が，マルチメディアにおける外来語と外国語についてお話をしていきたいと思っております。その後に，皆さまから御意見あるいは御質問を頂いて，テーマを更に深めていきたいと思っております。最近，外来語が非常に<sup>はんらん</sup>氾濫しているという声をよく耳にします。研究所でも数年にわたって外来語の委員会を設けまして，数回にわたって外来語言い換え提案を行ってきました。しかし今回はそれとはまた別の立場から，外来語及び外国語を取り上げていきたいと思っております。一つは，マルチメディアで使用されている外来語というのは，どのような配慮で，あるいは使用基準で使われているのかということを取り上げていきます。もう一つは，昔と比べて現在は，どれくらい外来語及び外国語が増えてきたのかという実態の報告，その二つに焦点を絞ってお話をしていきたいと思っております。とりわけ今回は，新たな視点として外国語に焦点を当てました。今までは外来語だけが，マルチメディアに取り上げられてきましたけれども，実は，その外来語の陰で，外国語が日本語の中で大分使われるようになってきています。多分，この傾向はこれからもっと助長されていくのではないかとすれば，今のうちに外国語の動向という面にも目配りをしておいて，今後の起こるであろう問題に対処していったほうがいいのではないかと，そういうことで今回テーマの中には外来語だけではなくて，外国語も取り入れたというわけです。以上が趣旨説明でございます。どうもありがとうございました。（拍手）

「新聞記事の外来語」 福田 亮

(配布資料 p.1~5)

司会 それでは早速ですが、最初のお話、「新聞記事の外来語」と題しまして、朝日新聞の福田さんからお話を頂きたいと思います。よろしくお願ひします。

福田 こんにちは。朝日新聞社の福田と申します。よろしくお願ひいたします。私、会社に入りまして20何年かになりますけれども、ほとんど校閲という畑で過ごしてまいりました。ですから、本日の話も、その仕事の中で見ているようなことについてお話しすることになります。逆に言うと、その立場からのことしか知らないと言ったほうがいいかもしれません。若干特殊な視点になるかもしれません。新聞記事のというふうに申し上げましたとおり、校閲という仕事は、新聞記事の部分しか見ません。新聞総体としては、広告も含めて新聞なのだろうと思いますけれども、私どもが仕事としている部分というのは、下の広告のところを除いた、記事部分のみということになります。ですから、いきなりこんなことを申し上げるのは何か恐縮ですけれども、先ほどの趣旨説明で、外国語というものがテーマになっているということですが、新聞記事のほうには、外国語というのが余り出てきませんので、ちょっとそちらが欠けてしまうということになりそうですが、その辺については御了承いただきたいと思ひます。校閲の仕事からということを先ほど申し上げましたけれども、どういう仕事か、余り一般的ではないと思ひますので、最初に新聞ができるまでの過程の中で、校閲というのは何を、どこでやっているのかということからお話しようと思ひます。ここにご覧に入れるのは、4月に入社試験がありますけれども、その入社試験を受けていただく学生さんに、校閲というのはこういうところですよということを説明するときを使うスライドです。新聞記者が記事を書くというのは、多分すぐに想像がつくと思ひますけれども、記者が書いて、それを各部門の取りまとめ役のデスクという所に出します。デスクが、今日この記事を紙面に載せようということになりますと、原稿を出す、私たちは出稿すると言ひますけれども、ということをしていただきます。そうすると、私どもと、それから実際に紙面編集を行う編集者という仕事がありますけれども、そちらに届きます。校閲では出された記事の中身を一生懸命読んでチェックをします。編集者は、その記事に見出しを付けて、四角い状態に組み上げる、ということをしていただきます。編集が終わりますと、印刷に回りまして、新聞ができて、販売所からこちらに届くという過程になっています。校閲の位置というのは、その編集過程の最後のところで、紙面がきちんとできるかどうかということを見ている立場です。記事を書いて、それから紙面を編集する人たちは記事を送り出す方向を向いている

わけですが、我々校閲は、その送り出す方向に属してはいるけれども、最初の読者です。読者の視点というものも忘れないようにして、つくられていく紙面を読んで、読む人にとってどうなんだということを考えるというのも仕事になっています。仕事の対象としては、記事を書くほうと、紙面を作るほうの二正面になっておりますが、今日の話としては、紙面のほうは省きます。記事に対してはどのようなことをしているかということ、間違っただけが あつたら直すというようなことをしています。記事の書き方のルールを設けており、それに合ったように、なっているかどうかチェックをして、そのとおりに直すというのも仕事になります。そちらのほうは余り一般的な理解がない部分かもしれませんが、朝日新聞の場合は、『用語の手引』という本を作りまして、記事の書き方についてたくさんのルールがあります。ここに書かれているようなルールで記事が書かれるように、それに反しているものがあれば直すということです。なぜそういうことをしなければいけないかといいますと、新聞の場合は、寄ってたかって作っているところがあります。朝日には 2000 人を超える記者がいるそうです。ですから、2000 人の人間が、てんでばらばらに好き勝手に書きますと、朝日新聞という題字の下で、とても統一した形の紙面になっていかないということがありますので、朝日の記事としてはこのように書くというルールを、割と細かく決めております。新聞記事としては正確に情報が伝わるということが重要なわけですが、もう一つ、たくさんの人に分かってもらうという重要な目的があります。そのためには、誰にとっても分かりやすい、読みやすい書き方になっていないといけないということで、<sup>はんざつ</sup>煩雑なルールを決めています。この中身についてずっと話をしていくと、何日もかかってしまいますので、申し上げます。主なルールというのは、実は漢字の使い方が大半と言っていいと思います。どんな種類の字を使い、その意味はどんなものというようなことです。外来語について、ルールという意味で言うと、「外来語の書き方」という文章がありますが、ここの記述しかないと言ってもいいかもしれません。言っていることは 2 点です。外来語、外国語は乱用しないようにというのが一つ、それからもう 1 点は分かりにくそうなものには説明を入れたり、注釈をしたりして、一般の人に分かるようにすると、この 2 点しかルールはありません。『用語の手引』全体としてはとても厚いルール集ですが、外来語の書き方に関する注意としては、この 2 点しかないと言ってもいいと思います。これだけで先ほど、目的としたような、分かりやすい、読みやすい紙面作りができていますのかということです。それで、今日のお話としまして、現状の新聞記事における外来語のあり方

として、新聞が目的としている、分かりやすく読みやすい紙面作りができていのかどうか、実際の紙面から見てみようと思います。もしそうでない面があるとすれば、それはどこに問題があるのかということ若干考えてみたいと思います。新聞記事と言っても、1日分で多い日は40ページぐらいありますし、それをどれだけ観察すると、全体を見たことになるのか見当もつきません。専門にそれを研究する人はきちんとした枠組みを考えるのでしょうけれども、私どもは素人<sup>しろうと</sup>でございますので、主として取り扱いがしやすい、分量を見てみました。今月のはじめ、1週間分ほどをチェックしました。実際に朝刊の一面の記事を読んで、そこに出てくる外来語と外国語由来の言葉で、カタカナ表記されているものが、どのように使われているかというのを観察してみました。今の朝日の一面、題字の下に「紙面から」というインデックスと言っていますけれども、どんな記事が載っているかという紹介と、それから1番下におなじみの「天声人語」というコラム、それから「折々のうた」、また、ある日も、ない日もありますけれども、「お知らせ」というのが載ることがあります。そういったものを除いたニュース記事を観察しました。見出しとか写真説明、それから記事によっては図のようなもの、それから表のようなものを付けますけれども、そういったものを除外した本文だけを見ています。それで、大体一面の項目としては、3項目から5項目ぐらい、ニュース記事が載っています。項目と言っているのは、本文のほかに解説とか、談話とか、こういうものがくっ付いているものを1項目と数えています。そうしますと1週間分で30項目ありまして、大体二千三百数十行、半端な本数のところがありますので、およそそういう数え方になります。それが土俵になりまして、その中に先ほどの外来語というものが、大体290いくつというものが出てまいりました。それを1枚の表にしたのがここにあります。便宜的に三つに分けてみました。A、B、Cというふうに分けてはいますが、最後のCは固有名詞として、人名とか、地名、それから団体名といったようなものです。これはこの話題に触れる場合には避けて通れないものですから使わざるを得ない、使わねばならないタイプの言葉だと思います。あと、Bのほうは、何らかの注釈なり、説明が付いているもの、それから「 」が付いていて、それだけで使っているのではないというものです。Aというのは、何にも注釈がない、地の文からカタカナの言葉を使うというものです。先ほどの外来語の書き方の注意で申しますと、何もしないで、注意して使っているというのがAの類、分かりにくいだろうから説明をしたりして使っているというのがBの類ということになります。まず、地の文だと、説明書きを使っているものに

ついて、大体こんなメンバーです。一度も見たこともないという言葉があるかどうかです。私が見た限り、私の感覚としては、日常的によく見る、ありふれた言葉が多いのではないかと思います。それから、回数的に見て、二千何百行に200弱ですから、大体十何行に1回という程度で出てくるということで、数としてそれほど多用しているものではないように思います。ですから、紙面にある現状を見まして、それほど私は記事として読みにくくないというふうに感じたわけですが、それは本当かどうかと。私は作り手なので、作り手の感覚では、そのように感じられます。皆さんがどうお考えになるかというのは、また別の話だろうと思います。実際に新聞の読者はどう考えているかというのは、どこかで調査されているのかどうか、分かりませんが、朝日新聞を読んでいる人はどう受け止めているだろうか、何か分からないかなと思います。これを紙面から探せないかなと思ひ、「声」欄という投書欄がありますので、その欄に外来語について触れている投書があります。それがどういうことを言っているかなというのをちょっと調べてみました。高々80人ぐらいですから、そんな大した根拠のあるあれではありませんけれども、80人ぐらいの人の投稿を読んで、どういうふうに行っているかを、大ざっぱに分けています。このごろどうも外来語が多くて、世の中にあふれている、乱用されているという意見が多い。それから分からない言葉があつて困つたというようなものが、これに続く感じ。それから、何か不満に思っている方が随分いらつしゃると。外来語の使用に対して肯定的な意見というものも若干ある。ただ、やはり何らかの点で不満に思っている人は、どうも多いように伺えました。その不満に思っている人たちが、どういうものに対して不満を感じるかという、対象が分かっているものというのは余りなくて、世の中一般に外来語が多い、乱用されているというような意見が多い。それに続くのは、新聞など、報道とか、それからメディアとか、そういうものでの使われ方がよろしくないのではないかという意見でした。私などは、どちらかというと、お役所が使っているやり方は、分かりにくいという意見のほうが多いのではないかと思いますけれども、どうもそちらよりも、新聞などでの使われ方のほうに、いかなものかという意見を述べていらつしゃる方のほうが多かつた、と思ひました。それと一つ特徴的だったのは、その年齢分布が60代、70代の方が多いと。投書をする御意見のある方というのは、その年代の人が多いというだけのことなのかもしれませんが、そのような特徴がありました。ただ、そういうことを踏まえると、先ほどの1面の記事だけを見ていると、それほどひどくないのではないかと思ひているのですが、

よく考えると、1面のニュース記事というのは、一番分かりやすく書こうという配慮が行き届いているはずの記事ばかりです。中のほうの、経済面であるとか、スポーツ面であるとか、専門分野の記事になりますと、先ほどご覧にいたようなリストよりも、もっと難しい、あるいは見慣れない言葉が並んでいるかもしれませんので、新聞全体を見ると、それほど分かりやすくはないのかもしれないなということはおぼろげです。それから、先ほど、ありふれた言葉ばかりというふうに申し上げましたけれども、確かに、07年2月という、この今の時点で見ますと、全然見たことがないぞという言葉は少ない、あるいは余りないというふうに言っているのではないかと思いますけれども、これが、例えば、10年、20年前にこのリストだった場合にどうかというと、若干様相が変わってくるのかもしれないなと思います。ちょっと私の個人的な経験で、ある言葉の一つこの中に見つけたので思い付いたのですけれども、コンビニエンスストアのことをコンビニというふうに略す使われ方というものについてです。90年代の初頭に、編集者という仕事を2年ちょっとやったことがあります。たぶん92年ぐらいだったと思いますけれども、見出しでコンビニというのを使うかどうかというのを、そのときの担当デスクと議論した記憶があります。経済面か何かで、見出しにコンビニというのを使おうかということで、まだちょっとこれでは読者は分からないのではないかという議論をした記憶があります。今ではもうありふれた言葉になっているわけですが、これがいつごろから使われてきたのか、記事データベースで調べてみました。コンビニという文字列で、コンビニエンスを除いた形で、年別に調べたのがこれです。先ほどの個人的な経験で、92年の時点では、ただコンビニだけでは分からないのではないかと考えたように、ほとんど使用量がなかったということが分かりました。80年代などはコンビニエンスストアというふうに使っていたのが多かったのだらうと思います。80年代の後半ぐらいに出てくるコンビニの略称では、「コンビニ店」というふうに、店という字を付けて使っている例が目立ちました。ですから、コンビニの4文字だけではまだ分からないという形だったのだらうと思います。それが、どんどん件数を増して行って、今では何の説明もなく使っても、多分読者も分かるだらうという判断で使っているという状況になってきました。先ほどご覧にいたようなA欄のリストですけれども、その中にも、さらって見ると、似たようなことではないかなという言葉が、いくつもあることに気が付きます。初出年というふうにしていくつか例を挙げていますが、これは記事データベース上の初出年であって、私どもの記事データベースは84年から収録されていますので、実を

いうと、83年とか、82年の紙面に全然出てこないかというのは、単に調べていないだけの話なので、保証の限りではないです。これが初出かどうかというのは分かりません。記事データベース上の初出年です。こうして今現在のA欄を見ると、非常にありふれていて、多分、ほかの言葉ではこれを言えないものがかなりあると思いますので、使わざるを得ないわけですけれども、これが日常語になるまでには、やはり一定の期間がかかっているのだろうなというふうに思います。それからもう一つ、新語というより、用法でも同じような推移になっているものがあります。我々の目から見ると、ありふれた語というふうに今は見えるのですけれども、ここに至るまでには一定の期間がかかっていると。そういう言葉がいつの間にか増えている現状があるということがありますので、年輩の方には、「ああ、増えたなあ」と思われる面があるのではないかと思います。次に、先ほどのB欄の、分からないだろうから説明を付ける言葉ですけれども、こういったものの中で、特徴的な動きをするものがありまして、一時期、わーっと出て、すぐに消えていくというものがどうもあるようです。二つほど挙げていますが、これは年別です。何かの機会があって出てきますけれども、その時期を過ぎると消えていってしまうと。先ほどのB欄のリストの中で、最近話題の「ホワイトカラー・エグゼンプション」という言葉があります。これがどうもその傾向をたどりそうだと思います。11月以降やたらだーっと出ていますけれども、結局、法律の提案を見送るということになって、グラフにはありませんけれども、2月になって20件ぐらいになっていますので、どうもそのまま消えていくのではないかと。ここに至るまでに、どういう経緯があったかということは残り時間がないのでやりませんが、数が増えたのは11月。それまでは残り前面に出ていなかったホワイトカラー・エグゼンプションというカタカナの言葉を出したのがどうもよくなくて。新聞の場合、難しい内容の制度とか、法律とかというものを記事にする場合に、編集会議なんかでデスクに説明しますと、編集長は「じゃ、それ、見出しはどうなるんだ」という質問を必ずいたします。要するに、それは一体どういうことが言いたいのだという説明を求めているのですが、このホワイトカラー・エグゼンプションに関しては、新聞のほうは、「残業代ゼロ」ということだ、というふうに理解をして、提案した人は同じことを思っていたかどうかという、多分違うことを考えていたのだと思いますが、どうも「とんでもないことだ」ということになって、見送りの方向へいってしまうということになったわけです。先ほどのB欄のような分類のものの中には、そのように、一時期に大量に出てきて、すぐ消えていくというものが、かなり頻々と出てきます。

1週間ぐらいの締めですから、例は少なかったのですけれども、こういったものがどうもいつも見慣れない語として新聞の紙面に出ているように思われます。これは、記者としては、避けにくいタイプの言葉、要するに、国側から拳がったというので、それを何かほかの言葉に言い換えるなんていうことはできません。ですから、説明を付けたり、注釈をしたりして使うことになるわけですが、最初は、小さな解説みたいなものを付けたりして、丁寧に扱っていますけれども、だんだん言葉の後に括弧<sup>かっこ</sup>をして簡単に説明を付けただけ、みたいな形になっていきます。使用度が急に減ってしまっても、扱いはあまり変わりませんので、何だかよく分からないと思われる要因になっているのではないかなと思います。1週間分くらいなので、詳しいことは申し上げられませんが、こういったことが見てとれました。最後に1枚だけ、古い資料が付けてあります。こちらは1931年、昭和6年の古い社報です。B5版くらいのペラの社報の中に、「こんな言葉はこう書きましょう」みたいな例が載ってありました。この中に外来語の書き方というのが載っていました。ご覧いただいて分かるように、書き方、表記の仕方が書いてあります。こちらの昭和18年のものも、やはり書き方の注意です。先ほど、最初にお見せしたような注記が出るのは、74年の『用語の手引』以降ですから、この30年くらいのことです。この後にお話しになるNHKの塩田さんの資料を拝見していたら、放送用語のほうでは、随分昔からかなり綿密に調べられた跡がありますが、新聞記事のほうは、書き方の注意ぐらいしかなかったと。ルールとして、どうしようということをお口うるさく言っていなかったということをご紹介して、私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

「雑誌に見られる外来語と外国語」 伊藤 雅光 (配布資料 p.6~13)

司会 どうもありがとうございました。それでは、引き続き、国立国語研究所、伊藤より「雑誌に見られる外来語と外国語」というテーマで、話を行いたいと思います。それではよろしくをお願いします。

伊藤 伊藤でございます。国立国語研究所では、1948年の創設以来、現代語の実態を把握するために、計量的な方法を用いて、マスメディアを中心に用語調査を行ってきました。表1をご覧ください。そこに(1)から(10)まで外来語調査のリストが挙がっております。扱われた調査資料は、新聞、雑誌、それから教科書、テレビ放送、といったような、国民の皆さまが日ごろ頻りに接しているメディアでして、それらについてどうい

ような言葉が何回使われているのか、というような調査を行ってきました。小さいものでも、延べ語数で10万語、大きいものでは300万語という、大調査でした。今日の発表では、この(5)から(10)の結果に基づいて御報告いたします。最初に(5)から(9)まで、つまり1980年代までのそれぞれの資料における外来語と外国語の状況を報告いたします。その後に、(5)、これは雑誌90種でして、1956年の雑誌1年分を対象にしております。それから(10)の雑誌70種は1994年1年分を対象にしております。つまり、40年の間にどれだけ変化があったのかという話をしていきたいと思います。それから、参考資料として、「Jポップ」というのがありますが、これは私がプライベートな時間に行った調査ですけれども、松任谷由実の1973年から2006年までに発表された、およそ300曲に基づいた調査で、延べ語数で3万ぐらいのものであります。このデータも将来の日本語の状況を予想する上では、大事な情報を提供してくれておりますので、これについても触れていきます。それでは、次のページ、7ページをご覧ください。下のほうの2です。1980年代までの新聞・雑誌・テレビ・教科書の語彙調査、外来語の量的性格とあります。図2にありますのは、新聞・雑誌・テレビ・教科書の延べ語数の結果が出ております。横棒グラフ、青いところが和語、黄色いところが漢語、それから、薄いのですが、肌色のところが混種語、そして、最後のピンク色のところが外来語のパーセンテージとなっております。一番右側に挙がっている数値が外来語のパーセンテージということになります。そうすると、一番小さいものは、高校教科書の1.9%、多いものでも新聞の4%ということで、大体3%プラスマイナス1%の範囲で外来語が使われているということが分かります。それから、次のページをご覧ください。図3、今度は同じ資料に基づきまして、異なり語数を集計したものです。そうすると、小さいものは中学校教科書の5.7%、多いものでは12%の新聞です。そうしますと、大体9%プラスマイナス3%ということになるわけです。先ほどの延べ語数と比べますと、異なり語数のほうが外来語のパーセンテージが高くなっています。これは何を意味しているかといいますと、外来語というのは、非常に種類が多いということです。ところが、一つ一つの外来語は余り何回も使われないと、というような性格を持っていることが、これで分かります。さて、皆さん、今、延べ語数で3%ぐらい、異なり語数で9%という数値が出ていますけれども、皆さんが思っている量と比べて、多いでしょうか、少ないでしょうか。多分、意外に外来語というのは少ない、というふうにお感じの方が多いと思います。そこで、9ページをご覧ください。外来語はこんなに少ないのに、なぜ多いと感ぜられる

のかということです。そこでお二人の方が、それについての意見を述べておられます。

5.1「目立つ部分に使われる外来語」ということで、石野博史さん。この方は元NHKの言語文化研究所にいらした方で、塩田さんの大先輩に当たる方ですけれども、石野さんの御意見では、外来語というのは街頭の看板、広告、店名、商品名、映画や放送番組の題名などなど、目立つ所に多く使われるので、印象が深いのだということです。それから、表記もカタカナとか、アルファベットを使うので、目立つのだと。だから、新聞、雑誌で使用が少ないとしても、実はこういうところで印象深く、目立つので、何か氾濫しているように感じられるのであろうというわけです。もうひとつの意見は5.2にあります「キーワードとして使われる外来語」ということで、樺島忠夫先生、元大阪府立大学の先生ですけれども。この先生の御意見は、普通の新聞、雑誌というのは、ありふれた、よく目にしている漢語とか、和語がほとんどだと。ところが、その中で使用率の低い外来語が使われると、それが目立つのだと。外来語というのは、まさにそういう、使用率が低くて、また名詞が多い。外来語は日本語に入りますと、ほとんどが名詞になりますけれども、そういうものはキーワードとなりやすいということです。ちょっとその基本的な語彙<sup>ごい</sup>というのを見てみますが、10ページをご覧ください。表5には雑誌90種の高頻度語のリストが出ております。雑誌90種、延べで40万ぐらいあるわけですが、そのうちの上位25の言葉を挙げております。一番目の「する」というのは、度数を見ますと1万3234、1語で1万以上も使われています。何回も何回も使われているわけです。それから「いる」というのは7557回使われているということです。それで、ここに挙がっている見出し語を見ていきますと、「する、いる、いう、いち、こと、なる、れる・られる、ある、に、その、もの」、という具合に、特徴のない単語ばかりです。こういう具合に、高頻度語というものは、無性格な単語で占められているのです。それもほとんどが和語と漢語で占められています。どのような文章にもよく使われる単語なわけです。こういうのを基本語彙と言いますけれども、雑誌、新聞といったような文章の中では、こういう空気のように目立たない、けどよく目にはするけれども、印象に残らない単語がたくさん使われているということです。8ページをご覧ください。図4として、度数別に見た語種構成比率、異なり語数を挙げていますが、延べ語数もほぼ同じ結果になります。これも雑誌90種の語彙を、度数の大小を基準にして、8つのグループに分けて、それぞれで5種の使用率を計算して、グラフにしたものです。左にある青い部分、これが和語です。右にある緑の部分が漢語で、真ん中にあります赤い部分が外来語というこ

とになります。一番下に度数 1 とありますが、度数 1 だけの見出し語を集めて、語種の比率を取るとこうなりますよということです。ですから、この横棒グラフを上から下に見ていくに従って、使用率の小さい単語のグループになっていますということです。それで、上からその赤い部分を見ていきますと、幅がだんだん伸びてきていることがお分かりになると思います。つまり、外来語というのは、使用率の小さいところでは、たくさん使われていますよということです。つまり、先ほどの樺島先生が言っておられた、キーワードというのは使用率の小さいということが一つ条件になるということがありますので、実は外来語というのは、そういうキーワードになりやすい性格を持っているということです。樺島先生の立場では、そういうキーワードというのはどうしても記憶に残りますし、大事な言葉ですので印象も深くなる。ですから、例え延べ語数が小さいとしても、実は目立つというのは、そういうような外来語の特徴があるからだということを行っているわけです。以上が 1980 年代までの状況でした。11 ページにお進みください。6 番、「1950 年代と 1990 年代の雑誌に見られる外来語と外国語-40 年間の変化-」ということになっています。ここでは、雑誌 90 種と 70 種の比較を中心にしていきます。なお、90 種では広告の調査はやっておりません。本文だけです。しかし、70 種では広告も行っておりますので、90 種と比較する場合は、広告と本文を分けなければいけませんので、それでこれは分けて、本文同士でまず比較してみました。図 5 です。 の 90 種の本文と、 の 70 種の本文を見ていきますと、一番左側に紫の部分、これが外国語の部分、そして、その隣の赤い部分が外来語ということになります。実は、研究所の語彙調査では、外国語は外来語として数えてきました。そこで、今回、このフォーラムのために、私が、外来語の中の外国語をより分けて、それでまた再計算した結果をここに載せております。そうしますと、紫の部分、90 種では 2% しかありませんでした。それが 40 年後の 70 種では 2.6 ですから、0.6% しか増えていない。これは延べですけれども、そういうことが分かると思います。一方、外来語は 2.7% だったものが 8% になっています。ですから 2.5 倍ぐらいに増えているということが分かります。それから、その下の広告にいきますと、今度は外国語が 7.2%、本文よりもやはり 2.5 倍近く多いということが分かります。それから外来語も 10% ですから、2% 多く使われています。先ほどの石野先生が、広告なんかでは外来語が多く使われているというのは、まさにこのことを指しているわけです。それでは今度は、異なりを見ていきます。次のページをご覧ください。図 6 です。これは異なり語数の同じ資料のパーセンテージですが、 の左側の紫の部分、

50年前は外国語は0.7%しかなかったのです。ところが、94年になりますと6.8%、およそ10倍という、急激な伸びを示しているということがお分かりになるかと思います。それから、外来語を見ますと、90種では9.2%だったものが24.7%、やはり3倍近い伸びを示しております。ここで注目していただきたいのは、ほかの和語とか漢語と比較してみてください。和語が27%ですから、外来語はほとんど和語に肩を並べるまでの勢力になってきています。それから、漢語と比べても10%ぐらいの違いしかないということです。これは先ほどの80年代までの状況と比べると、もう外来語が激増しているということがお分かりになるのではないかと思います。それから の広告を見ますと、外国語は本文では6.8%だったものが13.4%、ほぼ2倍も多く使われています。外来語のほうは29.2%、5%ぐらい多いということが分かります。そういう具合に、この40年の間に外来語が非常に多く使われてきているわけですが、これが将来は一体どうなるのだろうかということを考えるときに、実はJポップのデータが面白いことを教えてくれます。前のページにお戻りください。11ページです。図5の をご覧ください。

Jポップの外国語というのが9.8%です。広告よりも更に多い。一方、外来語は3.8%しかないということです。つまり、これまで外来語は常に外国語よりも多く使われてきていたのですが、Jポップを見ると、それが逆転したということです。外来語よりも、外国語のほうがたくさん使われている。これは一体どういうことなのかということですが、始めはJポップも漢語と和語の比率が高かったのですけれども、そのうち、外来語を多く使うようになりました。そうすると、外来語をたくさん使ってしまうと、かえって目立たなくなってくるのです。印象が薄くなってきてしまうわけですから。そういう中で、ある単語を目立たせたいといったときには、今度はアルファベットを使うしかなくなってくるわけです。それがこのJポップにおける外国語の増加の原因になっているのではないかと思います。このJポップというのは韻文ですので、その結果がすぐさま散文に関係づけるということは気を付けなければいけませんけれども、程度の差はあっても、本質的には同じことが起こってくるのではないかと。つまり散文のほうでも、外来語をどんどん使っていくと、陳腐化が始まります。そうすると、目立たせたい単語はやっぱり原語を使っていきましょう、という動きが出てくるのではないかと。それが端的に現れていますのが、雑誌の題名です。ここに婦人雑誌の題名のリストがありますが、これを見ると、外国語だらけです。例えば、グラマラス (GLAMOROUS) とか、ジュノン (JUNON) とか、セダ (SEDA) とか、ジル (JILLE) とか、ミスティ (MISTY)、パン

サンカン (25ans), ボーチェ (VOCE), エル・ジャポン (ELLE JAPON) とか, 英語ではなくて, イタリア語とか, フランス語で付けている婦人雑誌の題名が非常に多いのです。大体ざっと見ただけでも, 8割方はアルファベット表記になっています。これは過激に外国語を使っておりますけれども, 一つの方向性, 言葉を目立たせようとしたときの一つの方法としてアルファベットがあるわけです。もう英語を使いだすと, 今度は英語が目立たなくなりますので, そこでフランス語とか, あるいはイタリア語といったような言語も使い出すわけです。そうすると, 今度はそれが陳腐化した場合, どうなるか, あるいは近年の韓流ブームということもありますので, あるいはハングルが使われるかもしれない。分かりませんが。今後, そういうように, 日本語の中においては, 外国語というものが多分無視できない存在になっていくのではないかと, 実は10年ぐらい前から私は感じておりました, 少しずつ調査を進めてきていたわけです。それで, 将来, 外国語がどれだけ国語問題になるかどうかということは, 今の段階ではよく分かりませんが, 今のうちに外国語の動向に目配りをしておく, ということは大事なのではないかと。そこで, 今回の「ことば」フォーラムのテーマの一つに, この外来語を取り上げたということは, 実はそういうところに理由がございました。以上でございます。どうも御清聴ありがとうございました。(拍手)

#### 「テレビ・ラジオにおける外来語の過去と現在」 塩田 雄大

(配布資料 p.14~19)

司会 それでは三つ目の発表に参りたいと思います。「テレビ・ラジオにおける外来語の過去と現在」という題で, NHK放送文化研究所の塩田さんです。よろしくお願いたします。

塩田 塩田です。よろしくお願いたします。今日は「テレビ・ラジオにおける外来語の過去と現在」というお話で, 過去のほうも見てみようというふうに考えております。長い日本語の歴史の中で, 今, マスメディアなどで起きているこの状況というのが, どういうふうに位置付けられるのか, そして, これが将来の日本語にどういうふうに反映していくのか, あるいはどういうふうに反映させていったらよいのかということ, ちょっと考えてみたいと思います。まず, 本論に入る前に, 私の属しておりますNHK放送文化研究所について, 若干御説明します。私どもでやっている仕事の一つに, 放送用語の調査・研究というものがございます。これは, 放送に使う言葉を調査・研究する部署

ですけれども、ここで、先ほどのまさに福田さんとの違いを申し上げますと、福田さんの校閲部というのは、実際に記者が書いてきた原稿を、その場で実際に手を入れて直すところですが、私ども、直接直すことはしておりません。放送する前に、例えば、こういう言い方はどうでしょうという相談を受ける、あるいは、放送が終わったものを、こういうふうに放送したけれども、本当はこのほうが良かったということを考えてみたり、また、そういったことを調べる上での調査などを行っております。では、本論のほうに入るにあたって、まず、外来語というものについてちょっと考えてみたいのですけれども、外来語は何でいけないと言われるのか、外来語だからいけないのかということ、歴史的に見てみたいと思います。まず、放送は言うまでもなく音声言語、書き言葉ではなくて、耳から入ってくる言葉、テレビになってくると目からも入ってきますが、いずれにしても耳が中心の言語です。そういったところで、新聞とはちょっと性格が違ってくる場合がございます。歴史的に見ると、戦前の放送、これはもちろんラジオしかございませんでしたが、ラジオにおいては、漢語の問題が一番大きかったのです。当時の放送用語委員会の資料を見ても、その大半が単語について、こういう場合はいけないということよりも、漢語の問題です。漢語は同音異義語が多い、耳で聞いて分かりにくい。この漢語はこういうふうに言い換えようというものが、単語についても審議としては大半を占めていました。これについて、積極的にいろいろに言い換える。これとこれは違う意味なのに同じ音だから言い換えるというようなものが、戦前は大半です。ただ、戦前と申しましても、私が言っているのは昭和一桁代のころが中心で、大体昭和10年を過ぎるころから、だんだんとちょっと色彩が変わってきまして、開戦、昭和16年ごろにはもう決定的になってきますが、外来語を排斥すべきだというのが、だんだんと大きくなってきます。そういった雰囲気の中で、まず、漢語について、耳で聞いて分かりにくいという、それまでの伝統があったわけですが、やたらと手を加えるわけにいかなくなってきました。どういうことかという、これは一つは、NHK、当時は放送記者という独自の記者はおりません、通信社から来た原稿を、放送用に書き直して放送するということを行っていましたけれども、それについても大本営の発表を、これにやたらと手を加えたり、できなくなりました。つまり、耳で聞いて、いくら分かりにくくても、これをそのまま読まなければならない、という色彩がだんだん強くなってきた。あるいは、漢語の読み方についても、漢語の読み方の間違い、一般的にはこういうふうを読むかもしれないけれども、それは伝統的な読み方ではないとされてい

る読み方も、容認せざるを得なくなってきた。これはなぜかという点、<sup>くんじんちよくゆ</sup>軍人勅諭というものがございましたが、この軍人勅諭というのは、読み方も指定されているものですが、この軍人勅諭の中に出てきた漢語、こういうものはどうも誤読もあったようですが、歴史的には誤読とされてきたものも、軍人勅諭でこう読んでいるのだから、これはこちらの読み方も放送で認めるべきだということになってきたのが当時の状況であるかと思えます。そうした中で、外来語についても、それまでの、耳で聞いて分かりにくいから漢語を言い換える、ということよりは、外来語のほうにだんだん視点が移ってきて、これも国粹主義的な、今ふうに言うと、カントリー・アイデンティティーの面から、言い換えるべきだというふうになってきました。具体的に言うと、いろいろありましたけれども、例えば、昭和 17 年に、アナウンサーという名称をやめて放送員という名前に変わったり、昭和 18 年にはニュース、それまで「ニュースの時間」だったのですが、それが「報道の時間」という名前に変わったり、これも分かりにくいからということではなくて、いろいろな時勢を考えると、敵性語を使うべきではないという観点からの言い換えであります。そして、戦後になると、社会環境の変化、アメリカを中心とした文化が入ってきて、外来語が一気に増えます。ここで外来語が増えてきて、これは分かりにくいという問題になって、昭和 20 年代後半ぐらいから、外来語の問題が社会でいろいろ言われるようになったのですが、外来語の問題が余りに大きかったために、それまでの漢語の分かりにくさの問題が隠れてしまったのです。余り言われなくなった。漢語が耳で聞いて分かりにくいということが、余りに外来語が多いために、見えなくなってしまっている。これは現代でも、私どもが放送された番組、放送されたニュースを審議するときに、外来語の問題は指摘しやすいのですけれども、漢語の問題は言っても余り通じない場合があります。これは新聞でも使われているじゃないかと。けれども、放送は新聞とは違って音声言語ですから、耳で聞いて分かりやすいかということを考える必要が特にある。そういったときに、外来語の問題もさることながら、やはり本当は漢語の問題も合わせて考えていかなければいけないのです。特に参考になるものが、例えば、戦前の放送用語委員会の記録を見ますと、外来語の中でも、耳で聞いて分かりやすい、あるいは国民によく知られているものを、どんどん取り入れていくべきだという方針が、戦前には成されていました。当時、書き言葉の日本の標準語というのはほぼ完成されていたと言われてはいますが、大正 14 年にラジオ放送が始まって、それまで完成したと言われてきた標準語をそのまま声に出してみたら、実はこれがなかなか、

そんなに簡単にはいかなかったというふうになって、試行錯誤の末、また、放送用語委員会というものが昭和9年にできました。要するに、日本の標準語というものがまだ確立していないという認識が日本放送協会の中であったのです。そういった中で、外来語もどんどん取り入れて、日本語そのものを豊かにしていくべきだという、そういう声が戦前はかなり強かったのです。それが、戦時中になって、そういったものを余り言えない雰囲気になってしまって、今では、戦前の放送では外来語は少なかったと一言で言えますけれども、やはり戦前とはいっても、開戦前と戦時中とで、かなり濃淡があったようです。こうした流れを見てきて、今、私どもがやっている、例えば、この外来語はこう言ったほうがいいということを考えるに当たっては、それは国粹主義的に、あるいは、それは日本人の精神を脅かすものだからと、もちろんそういった観点からやっているわけではなくて、耳で聞いて分かりにくいから、あるいはなじみがないから、という観点からやっております。そういったところからすると、本当は漢語も一緒に考えなければいけないのですけれども、外来語は本質的に分かりにくいというものではない。ただ、入ってきてからの歴史が浅いので、分かりにくいものである可能性は非常に高いだろうと。つまり、チェックポイントといいますか、キーポイントとして外来語を使うときには気を付けたほうがいい。それは、歴史が浅いものが多いから、分かりにくいものである可能性が高いというような解釈をしております。次に参りまして、外来語を使うべきかどうかという判断、考え方ですけれども、これについてもどうも歴史的な変遷があるような感じがしております。具体的に申しますと、まず、外来語使用について、これは使っていていい、これは使ってはいけないというふうに指定する方法から、誰に対して使うのか、どんな場所で使うのかということ視野に入れた、柔軟な方針を示すというように変化してきているように思います。まず、私が考える個別規定方式というのは、今申し上げたとおり、ここで言いますと、1953年、昭和28年、ちょうど戦後において外来語が非常に増えた時期ですけれども、ここで放送協会、NHKがつくった『外来語集』という部内資料を見ますと、このようになっております。モーションというのに（三角）、モーターに（マル）、モーター・スクーターに×（バツ）というような形が付いております。このような形で、50音順の辞書のようなものがありますけれども、は放送用語として適当と考えられる、は専門用語として使う場合のほかは避けたい、×は放送用語としてはなるべく避けたい、というようになっておまして、事実上、は放送で使っていていいけれども、×は使ってはいけないというふうに、言葉それぞれについて

指定する形になっております。次のページに参ります。それから、理念提示方式というのは、第1に、カタカナの外来語の使用について、「なるべく使わないのが望ましい」という理念をまず掲げるものです。そうした上で、個々の単語の使用、使っていいかどうかについては、番組制作担当者、ニュース制作担当者の判断に任せる、こういうもの。個々の単語についての指定は行わないというものです。例えば、ここに示したのは、1983年、昭和58年のものですけれども、『NHK放送用語集』というもので、書いてある事項を見ますと、「この外来語集には、放送でよく使われる外来語のうち、特にカナで書く際に迷いやすいもの、表記が不統一なものを中心に収録した。つまり、外来語を書くときに、どのような表記で書くべきか、というものを示した資料です。なお、外来語の使用について、放送では次の点に注意する。1. 日本語で十分に表現できる場合は、外来語を使わずに日本語で言うことが望ましい。2. 適当な言い換えのないものや、専門用語で一般に分かりにくいものは、説明を付ける。3. あと、省略しますけれども、ここで示したものは、先ほどの福田さんの御発表ともほとんど同じもので、なじんでない外来語は言い換えなさいということです。理念を示しただけで、個別の語の、これはやめなさいとか、これはそうしなさい、使いなさいということは、あえて言わない、というものです。基本的にはこの線が現代にまで続いています。次に、理解度・言い換え案提示方式というのは、国立国語研究所の外来語言い換え案でなされている方法かと思いますが、まず、個々の外来語について、世論調査をして、その調査によって何%の人がこの言葉が理解できる、聞いたことがある、という数字を示した上で、もしこれを言い換える場合には、こういう言い方があるという案を提示する。こうした客観的な調査に基づいた理解度を示すことによって、個々の単語を使うべきかどうかの判断基準を提供して、また、その場合に、その場面なり、相手なりに対して、この外来語は使うべきでないと判断した場合には、どう言い換えるかという案を提示する。つまり、まず、最初にこの言葉は使うべきでないと決めるのではなくて、何%ぐらいの人が理解できるのかという資料を提示するという形のものかと思えます。これがよく一般には誤解されて、言葉狩りだとか、こういう言葉を使えなくするのはけしからんというふうになってしまうのですが、これはそうではなくて、あくまで言い換え案を提示している、そして日本人の何%ぐらいが理解できるのかを見せている、そういう客観的な資料です。非常に優れた方式ですが、私どものほうでは、これを独自に放送で使う場合について、世論調査をして理解度を調べるとか、一律の言い換え案を提示するということができないもので、

私どもではこういう方法が取れないのですけれども、国立国語研究所のほうではそのように客観的な方法を取っていると、こういうふうになっております。ですから、番組のほうで言いましても、個々の外来語を使う場合にも、それをニュースで放送するのか、子ども向け番組で放送するのか、あるいは専門家、準専門家向けの解説番組でやるのかによって、個々の、この外来語を使うべきであるとか、使うべきでないという判断が異なってくる、というふうに流れていると思います。それが、モダンからポストモダンへと申しますか、文脈なり、相手を離れて、言語というものを考えることができないということが、実践してみても分かってきたからなのだと思います。そういった意味で、NHKだけではなくて、新聞でも、個別の語について、使うべきである、使うべきでないという資料をつくっていない、あるいはつくれない、あるいはつくる意味が余りない、ということの背景になっているかと思えます。ちょっと戻りまして、国立国語研究所の外来語言い換え案は、ここに示したとおり、日本語の純粹さを守るとか、そういうためにやっているわけではないと。つまり、今生きている人たちが、きちんと意思疎通ができるようにするためにやっているのです、ということ相澤正夫さん（国立国語研究所）はおっしゃっています。次に1ページめくっていただきまして、まず、戦中から戦後にかけての外来語について見てみようかと思います。ここに示した外来語は、『放送用語備要』という、これも部内資料ですが、こういった資料が4年間かけてつくられております。これは4年間かけて、放送用語委員会という所で審議して、一つ一つの単語について、いろいろな単語を挙げて、その言葉の正しい使い方であるとか、あるいは正しい表記の仕方、新しい読み方などを示したものですが、大部分は人名や地名の読み方です。その人名や地名を読み間違えないようにする、あるいは、漢語について、この漢語はやはり耳で聞いて分かりにくいから、和語でこう言うとか、いうものですが、全部でおおよそ8000項目あるうち、外来語について私が拾ってみると、161項目ございました。これ、161項目の全一覧です。つまり、これはどういうことかという、ほぼ戦中に限って、戦中に放送では言い換えるべきだとされた外来語のリストだと考えていただいてもいいかと思えます。見てみると、現代では相当なじんだ外来語と思われるものにも、言い換え語が提示されています。言い換え語はここでは省略していますが、こういった言葉は放送では使うべきでないとされていたものです。こういったものを見ていただいて、次のページに参ります。次に『外来語集』、先ほど申し上げました1953年、昭和28年のものですが、これは外来語のみについてつくった冊子、本です。ほぼ3000語出て

いるものですが、先ほど申し上げたとおり、放送での使用について、、、という形で、すべての語に指定をしています。先ほどの161語とこの『外来語集』を付き合わせてみますと、1953年、昭和28年の『外来語集』で×になっているもの、放送ではなるべく使うべきでないものは、以下の言葉です。アウト・ライン、オーバーコート、キー・ポイント、ステートメント、スムーズ、ナショナリズム、パスポート、プラン、フレッシュ、ベークライト、ボルシェヴィズム、ライブラリー、ラジオ・ロケター、スクラップ。スクラップについては、戦時中の『放送用語備要』では、スクラップで言い換え語が出ている、事実上の×ですが、昭和28年のものでは、スクラップという単語の上ではくず鉄とか、新聞の切り抜きと言い換えなさいと。ただしスクラップ・ブックという複合語の場合はそのまま使っているというふうになっていますので、ここでは0.5というふうにカウントしますと、13.5項目が戦時中は使うべきではないとされていたのに、そのまま戦後もそれが引き継がれたもの、ということになります。次に、『外来語集』で  になっているもの、つまり、専門用語として使う場合のほかは、避けたいものとされているものは、次の17項目です。アイス・ホッケー、アグレマン、カルテル、ゴール、ゴール・イン、コミンテルン、スチール、ステップ、タッチ、チャーター、バスター制、フィナーレ、メンタル・テスト、モラトリアム、ラウド・スピーカー、リーフレット、ローカル・ニュース。こういったものが戦時中は言い換えるべきであるとされていたけれども、戦後になると、専門用語として使う場合は、まあいいだろうというふうになっております。これ以外のものは、戦後になると  になったものが114~5項目、また、戦時中の『放送用語備要』には載っていたけれども、『外来語集』に載っていない項目が16項目です。それを円グラフにしたものがこのページの下にございますが、ご覧のとおり、3分の2程度が白い項目、つまり、放送用語として適当であると、 印が付いています。つまりこれは、戦時中に言い換えるべきだとされた161語のうち3分の2は、戦後になると使ってよろしいと。10年くらいの間にこれだけの変化があった。急激な変化がここで見られるかと思えます。このように非常に歴史的な変化の激しい時代だったわけですが、次に、使うべきかどうかという問題と、あと、我々が普段目にしている外来語を、使う場合にどう読むのか、あるいは使う場合にどう書くのかという問題です。これについて簡単に御紹介いたします。ここでは「エイ」という発音を含む外来語の問題を取り上げていますが、まず、これはNHKの原則です。「エイ」という音を含む外来語を日本語で書き表す際に、現在は「エー」「ケー」という

のを原則としている。例えば、英語では「ゲーム」と言うけれども、これは「ゲーム」と発音して、「ゲーム」と書くということを原則にしています。「メール」も、確かに英語の元の発音は「メイル」ですけれども、「メール」と発音して、「メール」と書くというものが大原則。ただし、一部の語については、「エイ」「ケイ」と発音して、読むと「エイト」であるとか、「ペイ」、こういった個別の単語いくつかについては、長音の音引きを使わないで「イ」で書く、というものがございます。例えば、「スペイン」という国名を「スペイン」と発音する人は恐らくいないかと思いますが、このようにいくつかの語については、もう定着しているものがあります。それ以外は長音、音引きで書くというものがNHKの原則です。こういった原則がありますけれども、最近、連母音表記、「イ」を用いた表記が非常に多くなってきている。これについて、何らかの対策をしないといけないということで、最近着手をしております。どういうことかと申しますと、例えば、私は行ったことはございませんが、メイド喫茶なんてございますけれども、これについて、ほとんど現実には、外の看板から見る限り「メイド喫茶」と書いてあります。ただ、これはNHKの原則に従うと「メード喫茶」と書かなければならない。こういったずれをどうするのかという問題がございます。まず実態を見るために、インターネットの調査をしております。これはどういうものかといいますと、発音は別にして、WEB上でどういうふうな書き方がなされているのかという話です。例えば、下のほうにあるもので申しますと、「クリエイター」を、google という検索エンジンを使って、まず「クリエイター」というものの件数を検索してみる。そして「クリエイター」というものを検索してみる。その数を比較して、百分率にしたものを並べたのが、この図です。例えば「キャンペーン」というのを、「キャンペイン」という表記はほとんど現在でもない。いくら「イ」が増えてきているとはいっても、「キャンペイン」というのはない。けれども、一番下の「ネーチャー」は、「ネイチャー」という表記が圧倒的である。ただ、中身をよく見ると、この「ネイチャー」というのは雑誌の「ネイチャー」がほとんどですけれども、そういったことを考えても、実際、インターネットに接する人が普段見る表記としては、「ネーチャー」というものよりは「ネイチャー」のほうが多くなっています。ここで調べた言葉、キャンペーン、ナレーション、アニメーション、以下は、NHKの原則ではすべて長音音引きを使うべきであると現在されているものです。ですから、下のほうの黒い部分が多い単語については、より重点的に検討していかないといけない、という話がございます。ここでやっている調査は表記の問題です。放送は、先ほど申し

上げたとおり、音声言語ですから、まず書いてからどう読むかではなくて、どう発音されているのかということ調べなければ本当はいけない。それも、いろいろな人に聞いて、どう発音しますかというのは、これはなかなか多くの人数をやるのは難しいので、音声を聞いて、どちらのほうが親しみがありますかとか、どちらをよく聞きますかという調査を今やっているところです。ただ、こういうふうに表記が増えているとは言っては、実際に発音が変わってきているかという、なかなかつかみにくいところもあります。「ネイチャー」というのが多くても、少なくとも私が観察する限りは、「ネイチャー」とは発音していないのではないかというふうに思います。こういった発音と表記のずれをどう扱っていくのか、というものも私どもの課題になっています。これは昨日の話ですけれども、放送用語委員会というのがまたございまして、委員の一人に杉戸先生も入っていらっしゃいます。昨日決めたもので申しますと、「イ」については、これまで「メード」だったのですけれども、昨日の放送用語委員会で「メイド」という形に変更になりました。ですから、しばらくしたら、放送で、もしメード喫茶で火事か何か起きたら、メイド喫茶というふうに出るかと思えます。このほかに、昨日決まったもので申しますと、「アコースチック」という発音表記だったものが「アコースティック」に、「アーティスト」が「アーティスト」に、「アベレージ」が「アベレージ」に、「インタビュアー」が「インタビュアー」に、「クロゼット」が「クローゼット」に、「シェープアップ」が「シェイプアップ」に、「ドメスチック・バイオレンス」が「ドメスティック・バイオレンス」に、「ネール」が「ネイル」に、「ファウンデーション」が「ファンデーション」に、「ペティコート」が「ペチコート」に、そして「メード」が「メイド」という形になっております。これについても、実際に世論調査を行って、どちらで書きますか、あるいは、どちらをよく目にしますか、そういったものを調べて、過去にはこう決めたけれども、あるいは、原則に従うとこうなるけれども、現状はそうではないと思われる語について、<sup>てきぎ</sup>適宜変更を加えて、日々の放送に臨んでいくというふうに申し上げることができるかと思えます。最後に、5番、アルファベット語の問題というところに参ります。アルファベット語というのは、伊藤さんの御発表での外国語にほぼ重なるものでございます。アルファベットで書かれた語というものです。ここで申しますと「1 day (ワン・デイ) チケット」「cake set」ですとか、あと、この「¥400」あるいは「tel ください」とか、「etc.」とか、あと「GW (ゴールデン・ウィーク) の計画」といった、こういったものをアルファベット語というふうに私は呼んでおりますが、これについて

は外国語というもののとらえ方が、大きくって二つあります。一つは、先ほどの伊藤さんがお考えになったとおり、アルファベットで書かれているものを中心としたものを外国語ととらえるという考え方と、もう一つは、こういったものも含めて全部外来語としてとらえるものです。外来語の中にアルファベット語もあるととらえる立場でございます。これはそれほど大きな違いではございませんので、ここではアルファベット語という言葉を使っていますけれども、これがどういうふうに動いているのかというのは、先ほど伊藤さんの御発表にもありましたが、私は別の方法で調べてみました。『現代用語の基礎知識』という本がございますが、この中のコンピューター関連の項目を全部ピックアップしてみて、この中で、和語、漢語、外来語、アルファベット語がどのような構成になっているのかということ、5年刻みで見ました。そうすると、1985年の『現代用語の基礎知識』の中のコンピューター関連用語、398項目、このグラフの位置の一番左の下のところを書いてございますが、398項目のうち、純カタカナ語というのは、カタカナだけで構成されている言葉、外来語及び外来語の複合語が136項目、純漢語、漢語のみの言葉が54項目、そして純アルファベット語、アルファベットのみからなるものが19項目、これ以外は、和語はほとんどありませんが、あとは混種語といわれる、外来語とアルファベット語とか、漢語と外来語とかいったものが混種語ですが、ここでは混種語は示していません。これを見ると、まず、純カタカナ語については1985年に多かったものがちょっと減って、あとは横ばいです。それに対して、漢語が95年まではそんなに変わらないのですが、2000年でぐんと落ちる。それに対してアルファベット語は、順調にと申しますか、ちょっとずつ数値を上げて、2000年には純漢語の語数よりも、アルファベット語の語数のほうが多くなってしまっている。コンピューター関連の言葉では、今や、漢語の位置よりもアルファベット語の位置のほうが高くなっている、ということがございます。これ、全部、2005年で調べたら、もっと多くなっているかと思えます。また、当然こういった用語は放送にも出てきます。例えば「ホワイトカラー・エグゼンプション」なんていうのも、これは長くて、スーパーをするときには、これだけでもうニュースの項目のスーパーは終わってしまいます。ですから、短くするときもあります。する場合にどうしたらいいのかということで、例えば、その一つとして、NHKでは余りやりませんけれども、民間放送で「ホワイトカラー・エグゼンプション」を「WE」という形でやったり、そういったものがアルファベット語として出てきますけれども、こういったものも含めて、どう発音すべきなのかというものも、今

後考えていかなければいけない。現実問題として増えてきている以上、それを放送で取り上げる前にどうしたらいいのかというのは、これは放送が主体的にやっていかないと、どこも決めてくれないので、私どもでやっております。例えば、「IATA(アイエーティーエー)」というのは、普通は「アイエーティーエー」と読みますけれども、「イアタ」と読んでもよい。国際民間航空機関です。あるいは国際サッカー連盟、「FIFA(フィファ)」ですけれども、これを「フィファ」と読んでも、「フィーファ」と読んでもよい、伸ばしてもよい。そして「ISO(アイエスオー)」国際標準化機構は、「イソ」と読んではいけないというように、主要なものについて、逐次決めております。こういうふうなアルファベット語が増えるのは、つまり、和語というものの造語力、言葉を新しくつくる、生み出す力が非常に小さくなってきている、また、外来語でどんどん複合語をつくっていくと、どんどんどんどん長くなってしまって、テレビや新聞では字数なり、画面の面積が限られておりますので、短くする必要があります。その時に、こういったアルファベット語は非常に便利に使われますけれども、放送の場合は、それを読まなければいけないので、それをどう読むかという問題も、非常に困っております。また、最初のほうに戻りますと、外来語について、なぜ1語1語について、なかなかや×を決められないかというのは、私どもで放送している以上、外来語の使われ方、あるいは認知度というのは、数カ月で変わる場合があります。どういう例がいいかと申しますと、例えば「メタボリック」なんていう言葉がありますけれども、これは恐らく数カ月前、あるいは1年前は余り皆さんご存じなかったのではないかと思います。この1年で皆さんがご存じになるようになった言葉で、これを、例えば、1回調べて、では「メタボリック」は放送では使わないとしたところで、1年たったら、全く状況が変わってしまいます。今ではもう短くなって「メタボ」とか、「息子はスノボ おれメタボ」だとか、そんなことを言われるくらい、普通の言葉になってきてしまっている。また、一步振り返って考えてみると、まず外来語なり、アルファベット語が増えていくことは、これはもう止めようがないと思っております。ただ、それが余りにも早すぎるというのは、日本人全体にとって、余り幸せなことではない。つまり、余り早く増えてしまうと、コミュニケーション上の障害が生じてしまう。通じない人が多く出てきてしまう。つまり、増えるということは、これはもう仕方がない以上、どういうふうによりゆっくり増やしていくのか、そのスピードを少なくとも加速させないためにはどうしたらいいのか、ということを考えていくのが得策なのではないかというふうに思います。以上でございます。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。

< 休憩 >

### 【質疑応答・ディスカッション】

伊藤 それでは質疑応答に入りたいと思います。まず私あてで「外来語と外国語との判別はどのようになさったのでしょうか」というご質問をいただいております。10年前ごろから個人的にJ-popの歌詞で使われている語彙を調査したところ、外来語のみならず、外国語が非常に多く使われていることに気づきました。従来の語彙調査では外国語の使用は微々たるものでしたので、外来語と一緒に扱われていたのですが、J-popの歌詞の中では外国語の存在が無視できない状況になってきましたので、新しい試みとして私が表記を基準にしてやったということでございます。13ページに実はその基準を書いた論文を紹介しております。参考文献の3番目です。これは「計量国語学」という学会誌に発表したものですが、「ポップス系流行歌の語彙調査における外来語と外国語の判定基準」というのがありますので、詳しくはそちらのほうをご覧ください。それから、参加者1からの御質問ですが、「アルファベット表記語の進出は、縦書きから横書きの動向も要因ではないか」、これは確かに言えることだと思います。とりわけワードプロセッサが非常に普及しました。ワードプロセッサは基本的には横書きです。もちろん縦書きに表示することもできますし、印刷もできますが、それぞれに非常に細かな設定等をしななければいけませんので、やはり横書きで書いたほうが楽ということもあるわけです。そうすると、その中でアルファベット等が使いやすいという環境が整ったということがあろうかと思えます。また、携帯なんかでもメールのやり取りは、やはり横書きでやっておりますので、そういう環境が影響しているということは、十分考えられるかと思えます。それから、参加者2からは、「90種と70種を比較すると、漢語と外来語、外国語がともに割合を増やしている」ということです。ちょっと見てみませんが、11ページの図5を見ますと、黄色い部分が、の90種は41%だったものが、45%に確かに伸びています。そして、外来語も2.7%から8.0%に伸びている。漢語はほとんど名詞だということがまず挙げられます。先ほど言いましたように、外来語も名詞が多い。ということは、その分、和語が減った、ということは、和語の名詞が減ったという可能性が非常に高いです。では、名詞は漢語、外来語で使われているという場合に、もう一つ考えられるのは専門用語です。専門用語といっても、日々の専門用語もありますし、学術的な専門用語もあるわけけれども、例えば、雑誌、ファッションとか料理関係では非常

に外来語が多く使われます。それからスポーツ関係、これも外来語が非常に多く使われます。ですから、そういうような話題が多くなると、漢語とか、あるいは外来語が多くなるということがあるかと思えます。一方、Jポップでは和語が圧倒的に多いという御指摘ですが、これは理由があります。同じ図5の をご覧ください。和語が75.7%も使われているわけです。ほかと比べると、飛び抜けて使用量が多いのですが、これは実は文体が違います。Jポップの場合は、話し言葉になります。話し言葉の特徴は、和語が多くて、漢語が少ない。漢語をご覧ください。4.2%しかありません。ほかの雑誌と比べても、10分の1ぐらいしか使われていない。これはなぜかといいますと、漢語といいますのは、同音異義語が多くなるわけです。元々の中国語の発音は複雑です。日本語に漢語として定着すると、日本語の単純な発音に直されてしまいますので、そこで同音異義語が増えてしまう。例えば、横浜市立大学の市立（シリツ）というのと、それから私立大学の私立（シリツ）といったように、同じ字音の漢字が使われた場合、音で聞いただけでは、どちらか分からないということがありますので、話し言葉では漢語が避けられるというのは一般的に見られる特性です。次の御質問です。「外来語、外国語の割合は1994年で10%くらいですが、今後、どのくらいまで増えると予想されているでしょうか」ということですが、これは結論からいいますと、現在の状況を調べるともっと増えていると思えます。それは、インターネット及びパソコンの普及ということが重要なところでして、実はパソコンが一般的になりましたのは、Windows 95 が発売されて以降です。日本では1995年の12月に発売されました。それが行き渡るまでに1年ちょっとかかっておりまして、1997年以降にパソコンが、言わば家電製品化したと言われていました。その時にインターネットも普及してきました。ですから、インターネットというものは外国のサイトにつなげることが非常に簡単なわけですので、外国の人とのコミュニケーションとか、あるいは情報を取ってくるということが非常に簡単になりました。ですから、その影響を考えますと、1994年の雑誌の段階は、まだパソコンが普及していなかった時代でしたから、それと比べるとかなり増えているという具合に予想できます。私宛のご質問もまだありますけれども、私だけで回答を独占するのはよくありませんので、回答者を代わりたいと思えます。福田さん、いかがでしょうか。

福田 それでは先ほど質問されたことにお答えしようと思えます。先ほど、コンビニという言葉の使われ方が少し前から増えて、変化してきたという推移を御説明しましたけれども、「コンビニエンスストア、あるいはコンビニ店、そういった言葉の混在した時期と

「というのはなかったのか」という御質問がありました。グラフとしてはコンビニという4文字についてだけ示しましたがけれども、当然、コンビニエンスストアという言葉も、今でもたくさん使われています。コンビニが認知されていなかった時代にも使われておりました。なくなったと思われるのは、「コンビニ店」という表現だろうと思います。90年代初めには4文字のコンビニよりは、店を付けた形のほうが目にできたのですけれども、これは今ではそれほど一般的ではないように思われます。もう一つ、ホワイトカラー・エグゼンプションという言葉の新聞記事における使われ方の変化みたいなもので、最後、時間がなくて、はしょってしまいました。結局、「残業代ゼロ」というのが見出しとして定着したというように申し上げたわけですがけれども、御質問の方は、厚生労働省が法案として出そうとしたとき、それまでは「自律的労働時間制度」という言い方だったのでけれども、それに換えて「自由度の高い働き方にふさわしい制度」というふうに名称を改めて、それに「ホワイトカラー・エグゼンプション」というのをくっ付けて、法律にしようとしたところ、異論があって、その過程で、新聞記事での扱いの中で、見出しでは短く縮めるので、「残業代ゼロ」というのがどうも本質らしいということになったというふうに申し上げたのです。「その見出しになったのは、制度に対する悪意というか、マイナス面を強調しようということに基づくものではないのか」という御質問がありました。明瞭な悪意があったかどうかということは、ちょっと私には分からないのですけれども、厚生労働省が言った制度の名称の長さ、それからカタカナ語の長さ、どちらを取ってもやはり新聞の見出しにはならないわけです。では、それはどういうことなのかというのを考えると、残業代の話になったということではないかと思っています。ですから、制度に対するマイナス面を強調しようとしたかどうかというのは、結局はよく分かりませんが、そんなことはないと思います。当面、頂いた質問に対しては以上でございます。

塩田 質問票で頂いたものの中から申し上げますと、先ほど、私が申し上げた「メイド」を「メイド」に、「アコースチック」を「アコースティック」に、「クロゼット」を「クローゼット」になどの変更は、放送界全体なのか、NHK単独なのか、又放送用語委員会とは何か、という御質問がございました。まず、今回については変更という点ではNHK単独です。ただ、背景を申し上げますと、これは新聞ではすでにいいますか、メイド、アコースティック、クローゼットという決めがすでになされていた状況だからです。つまり、今までは新聞とNHKとで違っていました、これが一致する形になった、

というものでございます。放送界全体が整うのは難しいのですが、民間放送では、NHKのような研究所に相当するものはございませんので、どういふ発音表記を使うのかというの、おおむね新聞に従う場合と、あと、発音上はNHKのものを参考にする場合とあります。各個別の局の事情はあるかと思えますけれども、いずれにしても、今回、昨日の放送用語委員会、このメイドですとか、アコースティックについての丸は、新聞と放送とで一致する形になったというふうに申し上げます。そして、放送用語委員会というのは、大正14年にラジオ放送が始まった後に、もう、ほんの放送した年に、放送の言葉というのはひどいという投書が新聞に載っているくらいだったわけです。要するに、標準語をつくり上げるときに、非常に苦労して、こうでもない、あでもない、試行錯誤をして放送に当たっていたわけですが、全国放送をしていく上で、これはどうも共通の指針なり、共通の資料が必要だということで、昭和9年にできた組織です。この中には、広辞苑で有名な新村出さんですとか、その他、第2期の放送用語委員でいうと金田一京助さん、続いて金田一春彦さん、柴田武先生などもずっと入っていらっしゃるものです。これはあくまでNHKの放送で使う言葉についてのもので、これとは別に、新聞用語懇談会というものがございます。新聞用語懇談会は、各マスコミで代表者を出して、いろいろな決めをしている所で、福田さんも幹事の一人になっていらっしゃるところです。外来語を例に出すと、国が外来語の表記についてのゆるい決めを出していますけれども、新聞用語懇談会は、外来語の表記・書き方について、これを具体例として決める時に、個別の決定でないとなかなか話が進まない、これについてマスコミ各社で余りに違いがあると困るので、新聞と放送各社でこうしようということを、定期的に集まって、なるべくその差が出ないようにしています。それでもやはり、例えば、イラクのほうで戦争が起きれば、向こうの地名を放送する時に、各新聞社、あるいは新聞と放送で随分差が出てきてしまう。それはやはりアラビア語の専門家が少ないからということもありますけれども、そういったものの差が大きいのは、日本人全体として余りいいことではないので、なるべく小さくしようという目的で進めているのが、新聞用語懇談会です。これとはまた別に、新聞用語懇談会の中に、放送分科会という放送関連だけの会がありまして、そこにもNHKは所属しています。そういったものの決定の参考にいたしますか、かなり重きを置きながら、放送用語としてはどうすべきなのかを考えているのが放送用語委員会です。その後の質問に、「ファンデーションとファウンデーション、新聞用語集ではファンデーションであるけれども、

NHKでは、ついこの間までファウンデーションであったと。ほかに放送独自で決めたものはありますか」と。これ、いくつかありますけれども、例えば、よく問題になる例で、野球のマネージャーですけれども、放送ではマネージャーと伸ばすのですが、新聞ではマネージャーというふうに、棒引きがないです。これは恐らく新聞をご覧になったとき、時々気付いていらっしゃるかもしれませんが、放送ではあくまでマネージャーと発音をするのであれば、マネージャーと書くべきだという立場を取るのに対して、新聞では伝統的にこれはマネージャーと書いていると。ケアマネージャーと今でも書いているから、これをこうしようと言っても、なかなか統一が難しい問題です。こういうものも、立場が違うので、私どもとしてはどうしても発音するときのことを主体に考える。どう発音するべきかをまず考えて、それをどう書くかということを考える。新聞のほうは、必ずしもそうではないわけですから、例えばスパゲッティとスパゲティとか、いくつかのものについては、どうしても違いが出てきてしまうことがあります。次の質問ですけれども、「V(ブイ)の発音について。アナウンサーには、下唇をかむ発音をするように指示しているのでしょうか。あるいはビーの音でもよいのでしょうか。字幕にヴァイオリンとあっても、バと発音されているのが普通のように思います。二つ以上のカナに一つの音を当てると、視聴者は混乱しませんか」という御指摘ですが、おっしゃるとおりだと思います。これは、二つ以上のカナに一つの音を当てると視聴者は混乱するかと、私も思います。ウ濁、ヴのことをウ濁と呼んでおりますが、私は個人的には使わないのですが、放送用語及び新聞では使うことがあります。これについては、おおむね一般名詞、普通の固有名詞ではないものについては、基本的にウ濁は使わない。例えば、ビデオのことをヴィデオと書いたりすることはしない。ですけれども、地名や人名については、場合によって使うことがある、という決め方をしています。これはいろいろな意図があります。このウ濁は、明治期ごろから始まっていますけれども、これも特別な意図があってやっているわけで、要するに、そういった外国語らしさといいますか、雰囲気を出すために使っている場合もあるかと思えます。そういったものはなかなか、全部バで発音するならバで書くべきだという立場と、いや、だけど、これはヴで書かないと雰囲気が出ないと、ヴァレンティノのことをバレンチノと書けないという人もやはりいるので、これは現状という意味では両方混在しているものです。これは仮名遣いの例でいいますと、同じ音が2種類の表記に当たっている例というのは、これ、いっぱいあります。例えば、バレーボールのバレーと、ダンスのバレエと、同じ発音ですけれども、

片やバレエと書いて、片や、バレエと書きます。これは発音では仕分けることはできないけれども、表記の上で分けていると。同じような例でいうと、最近、私もびっくりしましたが、インターネットのブログですけれども、これは元々WEB LOG という英語があって、これ、英語圏でBLOG というふうに略語ができて、もう略語ができた段階で、日本語にブログという形が入ってきたのですけれども、最近はこのブログに動く絵、動画が付いているものがある、これをVIDEO WEB LOG というらしいですけれども、略してVLOG というらしいのです。これが日本に入ってきたら、ウ濁のヴログで書くということをする、昔のブログと区別することができます。実際にヴログと書いている人がいます。こういう問題も出てきますが、放送では発音し分けろということは無理ですけれども、同じ発音が、仮名遣いの上で書き分けられるということはあるということだけ、知っておいていただけたらと思います。次に、「コンピューターの表記について。80年代はコンピューターと伸ばす、長音が多かったと思いますが、90年代はコンピュータというふうに、伸ばさないのが多くなったように感じます。NHK、朝日新聞ともに長音ですが、社内でその点についての議論はありませんか。ちなみにNHKの塩田氏の発音では長音化されていませんでした。まず、最後の部分については、これは申し訳ございませんでした。放送に携わる者として、コンピュータとしか聞こえなかったのは、私の不徳のいたすところでございます。今後気を付けます。私自身は、ずっとコンピューターと発音していると思っていたのですが、どうも早口のせいで、そのように聞こえてしまったようです。これについては、まず、当時の文部省が示した指針では、コンピューターと伸ばすことになっています。今でもなっていますけれども、これとは別に、『学術用語集』というのがございまして、これは理工系の研究者が主にまとめているものですが、拍数が短い、つまり、言葉が短いものについては長音表記するけれども、長くなってきた場合には、長音を省いてもよい。どういうことかいうと、具体的に、プザーというのは、これはプザではなくて、プザーだけれども、エレベーターというのはエレベータと、確かこれは書くというふうに決めていたと思います。理工系では特にエレベータとか、コンピュータというふうを書く慣用が強く、これは『学術用語集』で決めていて、法的な決めとして2種類あります。ですから、法に従って、例えば、仮に、「NEC コンピュータ」という会社があったとしたら、もし放送で取り上げる場合は、これはNEC コンピュータと書かざるを得ないし、言わざるを得ない。だけれども、一般名詞として扱う場合は、コンピュータというふうに伸ばします。こういうふうに、一見、矛盾に見えるか

もしれませんが、一般名詞と固有名詞で違う場合があります。そして、社内での議論についてですけれども、これは頻繁に質問が来ます。これは伸ばしますか、伸ばさないですかと。逆に伸ばさなくていいのに、不用意に伸ばすこともあります。データというのは、データでいいですね、これは英語でもデータですから。だけれども、データと伸ばすのがよくあります。こういうものもそれぞれの語についてやはり議論しています。そして、新しい外来語が入ってきたときには、これは伸ばす、伸ばさないというのをやっています、新聞と放送で今だに統一できないのが、ゴールデン・レトリバー、ゴールデン・レトリーバーです。これが新聞はゴールデン・レトリバーですけれども、放送ではレトリーバーになって、これは元の英語でもレトリーバーと発音記号で伸びているので、レトリーバーじゃないかなという形に今なっています。今後また検討するかと思います。

伊藤 ちょっとそこでお休みください。御質問がどうも、表記と発音というところに集中してきているようですので、ちょっとこれをディスカッションのほうに広げていきたいと思えます。まず、外来語の表記に関しましては、実は具体的に大きな変化がございました。明治期に外来語をカタカナで表記する場合は発音主義、つまり発音に近い形で表記するということが一般的に行われていました。例えば、ドイツの文学者のゲーテ、あれはドイツ語原音ではオーのウムラウトで、ギョーテ (GOETHE) という発音です。これをカタカナで表記するというのは、相当に難しいものです。それで、明治の人たちはそれをどう表記したかという、ギョエテと表記しているわけです。ギョーテ (GOETHE) という発音ですので、何となくそれらしく聞こえます。それから、ヘボン式ローマ字のヘボンはヘップバーンです。あのヘボン先生という方は、実はオードリー・ヘップバーンの御親戚らしいのです。オードリー・ヘップバーンというのは、ヨーロッパの王家の血筋をひいているらしいのですが、その親戚がアメリカに渡って宣教師になったわけです。そのヘボン、なぜヘボンと言うのかと言うと、Audrey Hepburn と書いて、実際はオードリー・ヘバンと発音します。そうするとヘボンと聞こえるわけです。それから、ロシアのことをオロシアと言いました。なぜオが付いているのだろうと皆さん、不思議に思われるかもしれませんが、実際にロシア人の発音は、オロシェ、オロシェという発音です。つまりオロという流音をはっきりさせるために、その前に口の母音も発音しているのです。オロシェ。それを日本人が聞いて、「あ、オロシアの方ですね」と、いうことになったわけです。そういう具合に、明治期では発音を尊重した表記が一般的に行われ

ていました。ところが、現在はむしろアルファベット表記をそのままゆっくり読んだときの発音になっているわけです。ですから、先ほどのヘボンというのは、確かにゆっくり読むとヘップバーンと読めるわけです。そういうような時代的な表記基準の動きということが見受けられます。塩田さん、例えば、今日の資料の 18 ページをご覧ください、18 ページのそこのグラフの横に、NHKでの表記とありまして、すべて長音表記ということで書かれていますけれども、これには何らかの基準というようなものが、NHKでは設けられていたのでしょうか。

塩田 イにしない場合、基準というのはどういう？

伊藤 つまり、正しい表記はエイであっても、実際には日本人でエーと言っている人が多ければ、エーにしてしまうとか、そういう発音主義を取っている、というような。

塩田 発音主義です。まず第一に、ほとんどの語については、日本人はこういった音の並びのものについては長音で発音していますけれども、一部の語について、例えば、8 を意味するエイト、これをエートという人は、当ても恐らく少なかったでしょうし、今もほとんどいないと思います。あと、先ほど申し上げたスペインとか、こういったように、いくつかの語については、これはもうイというのが圧倒的であると。であるけれども、それ以外のものについては長音で発音する。最近はいと書いて、長音で読むと、そういうふうなものが多くなってきています。先ほどの例で、特にネイチャーという例が圧倒的ではあるけれども、実際の発音は恐らくネーチャーのほうが多いのではないかと。つまり、元の英語は確かにネイチャーであるから、ネイチャーと書くのがいいけれども、実際の発音はそうではないのではないかと。ということで、ネイチャーという表記がインターネットを引いてみると多いから、では、ネイチャーにしようかというふうに、放送ではなかなかすぐにはいけないところがあります。そういうふうに音を中心にして考えるべきであろうという立場は崩せないと思います。

伊藤 そうしますと、この 18 ページのグラフ、これはインターネットの Google で調査をなさったということですが、下にあるもの、横棒グラフの黒い部分が多いものは、これは、例えば、イミテーションというのはイミテイションと書いている。それからステータスというのもステイタスと書いている、というのが見られるということですが、つまり、実際にエイと書いても、本人としてはエーと発音している方が多いのではないかと。という御意見でしょうか。

塩田 はい、実際にはそうだと思います。それは調査によって、明らかにしなければなら

ないかと思えます。

伊藤 そのとおりかと思えますが、ちょっと私が気になっていますのは、今、若い世代は英語に対する抵抗感がなくて、むしろ積極的に、学校に通ってまでも英語を身に付けたい。その目的としては、とにかく外国の人とコミュニケーションしたいという時に、英語の発音に近い表記にするという傾向があるいはあるのではないかと。ですから、ネイチャーの場合でも、実際、ネイチャーと英語の発音をしているわけですがけれども、それに親近感をむしろ感じて、エイと書くというようなことがあるのではないかと思えますが。それにちょっと近い現象といたしましては、昔、レモンティーのことをレモンデーと書いていたことがありました。それからビルディングはビルヂングと、そういうふうに書いていた時代もありました。ところが今はもうほとんどそれらは姿を消して、レモンティーあるいはビルディングという具合に、イの表記をして、しかも発音もできるという日本人がほとんどになってきたのだらうと思えます。現代語の発音には、そういうティーというような発音というのは存在していなかったのですが、英語教育が非常に盛んになって、そういう発音が簡単にできる世代が増えてきて、それでもうデーと言う人がいなくなって、ティーが当たり前になってきたと。それとちょっと似ている現象なのか。つまり、エイというのが実は英語では正しいので、エイということ意識的に書いている。もちろん実際に発音がどうなっているのかというのは、私も分かりませんが、そんなことを感じておりました。それでは、そういうエイと長音の関係ということについて、新聞のほうではいかがでしょうか。そういうような原則というようなことは？

福田 新聞のほうは、発音と表記というふうに対応させているというよりは、ルール的にこうすると決めて、そのとおり書き出すと。表記というのは、余りこころ変えないほうがいいものですから、ずっと安定させていきたいみたいなところがあって、結果的に保守的に書いているような面があるように思います。本来的には、二重母音を「エイ」とか、「オウ」というふうに書いてもいいだろうなというものを、長音にしているケースというのは、どうもあるように思います。また、これをいつ変えるかという、タイミングというのは難しいなという感じがあります。一般的に発音が皆変わったから変えようとか、調べるという手だてもなかなかありませんので。放送なんかですと、切実に御自身で発音するということがあるのだらうと思えますけれども、書き言葉のほうは、その辺の対応というのは、余り機敏に行われない傾向があるのではないかなというふうに私は思います。

伊藤 先ほどちょっと言い忘れましたけれども、外国語が日本に入ってくる時、エイという発音は基本的にはエーになることが多いです。これは実はエイという発音の仕方は、エネルギーを使う発音の仕方なのです。日本だけではないのですけれども、一般に、なるべくエネルギーを使わないような発音に変化するということがよく見られます。ですから、ネイチャーと言うよりは、ネーチャーと言ったほうがエネルギーを使わない。それでこういう長音表記というのが、日本の外来語では定着したと思いますが、もしもそういう方向性とは逆に、エネルギーを使うネイチャーのほうが、実際の発音で出てきているとすれば、それは非常に面白い現象だと思います。ここで、表記と発音についてはお休みいたしまして、次の話題に移りたいと思います。「外来語と外国語の中に分類できないものが、最近の歌謡曲などの中に出てきます。どういうものかという、I love で終わって、後がない、you がいないというもの、それから、I celebrate で終わっている、つまり目的語がない、間違った英語を歌の中に使っているというようなことですが、こういうのはどういうふうにして分類したらいいのでしょうか」ということですが、ちょっとそれについて、例を補足したいと思います。ここに書きましたのは、松任谷由実の歌の中のフレーズで、「サングリラをめざせ」という歌の一節です。それを見ますと、「目をそらさずに watch me」、watch me のところはアルファベットで書いてあります。それから、「腕を伸ばして touch me」、touch me のところはアルファベットで書いています。それでいて意味がつながっているのです。watch me というのは、「私を見て」。つまり「目をそらさずに私を見て」、touch me は「私を抱いて」、「腕を伸ばして私を抱いて」ということで、日本語と英語を混在させることによって、一つの文として成立している表現です。『平家物語』は和漢混淆文<sup>まじり</sup>という、和文と漢文が入り交じった文体になっていますけれども、それにならって言うと、「和英混淆文」と言いたくなるような表現が使われています。こういう場合、どうするかというと、やっぱり「目をそらさずに」のところまでは和語として認定して、「watch me」は、これは英語として認定するしかないわけです。先ほどの御質問では、I love で終わって、目的語がない。それは間違った英語だけれども、英語としてカウントするしかないです。言わば和製英語といえますか、そういうものとしてとらえざるを得ない。聞いている日本人はそれでも構わないのです。つまり、英語の部分は意味が分からなくても構わないのです。戦後、欧米の歌曲がどんどん入ってきました。とりわけアメリカからいろいろと英語の歌が入ってきましたが、我々、日本人というのは、意味が分からなくても、ああ、いい歌だなあと思ってしまうところ

があります。実はこれは日本人だけではなくて、フランス人もそうだとします。ビートルズの歌は好きだけれども、何を歌っているか分からないと言うのです。つまり、歌というのは、フィーリングとか、そういう、聞いて心地よいというところが大事であって、実は意味、内容が伝わらなくても、そのままを受け入れられるというところがあります。ですから、先ほどの御指摘のように「I love というのは英語でしょう？おかしいじゃないか」と言っても、聞いているほうは何とも思っていないわけです。とにかく、そういう場合でも、英語としてカウントするということになるかと思えます。それでは、まだ質問票残っているかと思いますが、塩田さん、お願いいたします。

塩田 「戦時中、ラジオを何と言い換えたのか」という御質問ですけれども、ラジオは言い換えませんでした。ラジオはラジオのままです。またテレビができたのは、昭和 28 年ごろだと思いますけれども、当時から言葉だけにはありましたが、テレビジョンあるいはテレビというふうに言っておりました。次に、「コンピューター関係は、カタカナ書きが増えている中、携帯のように外来語にならない言葉もある。日本語のまま残る語には、何か法則性があるのでしょうか。」これはあるなら私も是非教えていただきたいのですけれども、確かにそうです。いくつかの言葉は外来語になりませんが、ただ、私が一つ考えているのは、先ほど、伊藤先生の御発表の中で、カタカナ語では目立たないからアルファベットを使うというものがありました。最近カタカナというのは、別に、格好良くも何ともないです。先ほどは松任谷由実でしたけれども、ほかの歌手は、全く普通の言葉でやって、外来語を全く使わないという歌手も増えていきますし、むしろ昔より、人によっては使わなくなっている。そのほうが目新しいといいますが、耳新しいといいますが、目立ってきている、そういうようなことがあるかと思えます。ですから、いくつかの言葉は確かに外来語ではありませんけれども、例えば、よく若者言葉と言われるものの中には、マスメディア経由でないもの、つまり、若者の中から自然に出てきたものは、余り外来語はないです。これは、いくら海外との交流が簡単になったとはいっても、私をはじめとして日本人は英語がそんなにできませんから、英語で流行語を自分でつくり上げるほど能力はないわけです。ですから、やはり皆に広まっていく流行語は、マスメディア経由なら別ですけれども、下から上がってくるものは、和語であり、漢語である、あるいは方言である、というように私は思います。

伊藤 ちょっとそこでお休みください。話題が非常に興味深くなってきましたので、ディスカッションのほうに広げさせてもらいます。確かに、私も、昨日、NHKのポップジ

ヤムを見ました。その中で歌われている歌を見ると、外国語が出てきたのは2曲ぐらいしかないのです。あとはほとんど和語と漢語です。もちろん若い歌手が歌っているわけですが、外来語の入っている歌は1曲ぐらいしかなかったです。これはどういうことかというところ、近年、世界的に日本ブームというのがどうも起こっているみたいで、つまり、ジャパニーズ・クールというような番組がNHKにありますけれども、とにかく、まずはアニメとか、漫画が非常に人気を博しました。そうすると、その後は、音楽も多分面白いのではないかとということで、ロックとか、そういう日本のJポップが欧米で持てはやされるようになった。そして、更に日本の量とか、あるいは和食、今、パリではもう何十軒も寿司バーがあります。そして、日本人ではないオーナーが経営している怪しげな日本食を出しているジャパニーズレストランが何軒もあるということです。そういう中で育ってきた若い世代の日本人たちは、恐らく我々の世代よりもコンプレックスが少ないのではないかと。つまり自信を持った日本人が増えてきている。松任谷由実の世代は、言わば西洋に憧れていた世代です。ですから、西洋人が作ったような歌をつくりたいということで、こういう外来語とか、外国語をいっぱい使ってきたけれども、若い人たちはそういう感覚がなくて、むしろ日常使っている和語とか、漢語で、素直に自分の心を表現する。そうすると、聞き手も意味を素直に受け取って、感動してくれる。というような、本来の意味でのコミュニケーションがどうもできているのではないかと。ですから、将来的には、むしろ、日本回帰現象が、そういうJポップの中でも続いているのではないかと。塩田さん。

塩田 おっしゃるとおりだと思います。

伊藤 私が今日、お話ししましたことは、あくまでも松任谷由実世代のJポップであるということで、補足を付けました。それではまた、御質問があれば。

塩田 「二重母音の表記について、メーンは本来はメインである、コームは本来はコウムである、ベースは本来はベイスである、など、実際の発音は二重母音であるものを、長音で表記する理由は何か。また、コンピューター、スーパーなども、これは実際の発音は伸びていないのに、長音でしている理由は何か」という御質問ですが、実際はという解釈ですが、私が申し上げている実際にというのは、一般的な日本人はどう発音しているかということでお話しております、英語でどういう発音をするかということ、外来語については基本的に考えてはいません。参考にはいたしますけれども、元の英語でどうだということ、それほど強く働いてこないと思います。

福田 今、余り二重母音で問題なのはいいのですけれども、Vの音をヴの表記をするかどうかということが、割と話題になることが多いです。実は、NHKと朝日新聞は今度、レオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」というフィレンツェの絵を共催で公開するのですけれども、この「ダ・ヴィンチ」という表記をどうするかで、一般的にはヴが使われているというので、うちでもそのようにしているわけですが、ほかの人名などに、今のところ、ヴを使っていないものですから、ダ・ヴィンチだけ別扱いというのもどうかということ、今、紙面モニターという方をお願いして、いろいろな質問をして答えていただいています。この間、こういう表記についてどうかという質問をいたしましたところ、やはり人名のようなものについて言うと、「ヴ」のほうが自然に見えるという御意見がとて多かったです。ですから、これを今、どういうふうにしようかというのが、ちょっと考えなくてはいけないのかもしれないなと言っています。ただ、一般の外来語にもヴを使うかどうかということは、また話は別になってくるかと思えます。

塩田 ウ濁についてちょっと、妙に浸透しているものと、そうでないものと、言葉によります。例えば、固有名詞にしても、……というのは比較的よくウ濁を目にする例ですが、一方、固有名詞でも難しいかもしれないのは、バレンタインデーをヴァレンタインデーという例は余りないような気がします。それから、1, 2回、ウ濁をやるとか、やめるとかということもありますけれども、やはり個別のものになってしまうのが私たちの仕事で、どうしてもそうなってしまいます。個別の言葉で判断していかざるを得ない、というところがございます。私のほうの質問で言いますと、「発音について、スムーズは本来はスムーズであり、ルーズは本来はルーズである」。これは恐らく英語が根底にあるかと思いますが、これは御指摘のとおり、もし英語でそれを使う場合はスムーズですし、ルーズです。ただ、例えば、「NHKニュースセブン」ですと言ったら、皆さん、どうお感じになりますかね。相当変な感じがすると思いますが、このように、「クローズアップ現代」もそうです。これも相当変だと思えます。先ほどの質問と関連しますが、一部の語については、元の英語でどう言うかということから離れて、ニュースとか、クローズアップというのは、これはもう日本語での外来語では、この形で定着しているというふうに私たちは考えています。こういうものが時々出てきて、よろしければ……と思えますが、最近、体をほぐすという意味でリラクゼーションとか、リラクゼーションという言葉がありますけれども、リラクゼーションとおっしゃる方はどの位いらっしゃいますか。（\*手を挙げてもらう）いらっしゃらない。リラクゼーションは。ほとんどですね。こ

れ、英語にお詳しい方はリラクゼーションということをご存じかと思います。元はリラクゼーションと言いますけれども、なぜか、これはリラクゼーションで入ってきてしまって、インターネットで検索しても、もう圧倒的にリラクゼーションが多くなってしまいます。このように、新しい言葉とか、そういう習慣が随分早いうちに定着してしまう言葉もあって、我々を悩ませています。次に、複合語についてですけれども、「本来は複合語の表記は中黒（・）が入る。例えば、シニア・ファイナンシャル・アナリストであれば、シニア・ファイナンシャル・アナリストと入るべきなのに、最近はないものが多い。昔はアイス・ホッケーだったのに、最近ではアイスホッケー、ホワイトカラー・エグゼンプションも、そのうちに中黒がなくなるのでしょうか」という御質問ですが、これは確かにそうです。次第になじんでくると、無くなってきます。セクシャル・ハラスメントも最近では余り中黒がないような気が私はしています。要するに、大体なじんでくると、その言葉の由来というものを考える必要がなくなってきて、中黒が消えていく傾向にあるかと思います。

伊藤 どうもありがとうございました。もう時間が押してきました。まだ御質問はいっぱいありますけれども、最後に一つこれを取り上げます。「外来語は日本語の表現を豊かにするものであり、悪くない存在だと思いますが、どうでしょうか」ということですが、確かにそういう側面があると思います。もしも日本語にそういう外来語が全く入ってこないとなると、非常に表現力に乏しいものになるかと思います。ただ、生活をする上において、大事な情報の場合は、まずは分かりやすいということが優先されるべきだと思います。ですから、余り分かりにくい外来語は、生活に直結するような情報にはそぐわないと思います。ただし、そうではない、例えばファッションとか、料理とか、あるいはさっきの「ポップ」とか、美的要素を取り込んでも、コミュニケーションには大した支障をきたさないといったようなところでは、そういうものが取り入れられることによって、活性化していきますので非常に重要なものではないかというふうに思っております。その辺について、何かありますか。よろしいですか。ということで、もう時間になりました。今日はお忙しい中、にぎにぎしく御参集くださりまして、誠にありがとうございました。これでディスカッションを終わりにいたしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

司会 これで今日の第30回「ことば」フォーラムを閉めたいと思います。3時間お付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。（拍手） <終了>